

【千葉】

絆 再生 - ちばのNPOから < 6 > 千葉まちづくりサポートセンター 無人駅に交流拠点

2012年1月7日

アパートに住んでいるが、隣の人の顔も知らない。住宅街でも、近所付き合いはめっきり減った。こんな経験や気持ちを抱いたことのある人は、少なくないだろう。

千葉まちづくりサポートセンターは、希薄になりがちな都会の人間関係を取り戻す試みをしている。

拠点となる場所は、意外なところにある。千葉都市モノレール作草部駅。一九九五年に無人化された。改札脇にある駅務室には駅員もいないはずだが、昨年十月から時折、和やかな話し声が漏れてくる。



利用者と会話を弾ませる豊口さん(中)。みちくさではパソコンで食生活や運動の状況を振り返るシステムを利用できる
= 千葉市で

室内にいるのは駅員ではなく、同センターのスタッフらだ。中高年からお年寄りまで、シニアが気軽に立ち寄れる「居場所」づくりを目指し、「いきいきスペースみちくさ」を開設した。

無人駅と触れ合いスペースの取り合わせが生まれたのは、千葉都市モノレールが使用していない駅務室を無償で貸し出す「モノレール応援隊事業」を始めたのがきっかけ。障害者の乗降補助や周辺の案内など簡単な駅業務を担ってもらう代わりに、空きスペースを市民活動に活用してもらう事業だった。

「みちくさ」では、スタッフ代表の豊口恵久子さん(59)が、ふらりと訪れる人を笑顔で待っている。ただ「ここは何もしないところ」(豊口さん)と意外な言葉も口にする。

訪れた利用者は、お茶をすすりながら世間話に花を咲かせる。パソコンを使って食生活や運動習慣を振り返るシステムもあるが、主役ではない。「立ち寄る人が増えれば顔なじみになったり、知恵を分け合ったり。シニアになって、行くところがないよりずっと楽しいでしょう」(同)。着飾ったり、目的がなくても立ち寄ったりできる日常の生活空間として、「みちくさ」を位置付ける。

豊口さんは青森市出身。結婚して千葉市に移り住んだ。子育てをしながら、国民健康保険の集金員で地域をくまなく歩いたり、高齢者向け配食サービスのボランティアをしたりする中、「定年を迎えて、いきなり地域にとけ込める人ばかりじゃない。どこか居場所が必要」と感じていた。

千葉市には、市民の余暇活動などの拠点となるコミュニティセンターも随所にある。千葉まちづくりサポートセンターも市の指定管理者となり、長沼コミュニティセンター(同市稲毛区)の運営に携わった。

ただ、用がなくても気軽に立ち寄る「地域の縁側(縁が和)」のようにしたい豊口さんらの理想と、利用は予約を基本とするコミュニティセンターの運営にはギャップがあった。管理者として指定の五年間を終えたのを機に、新たな施設をつくろうとできたのが「みちくさ」だ。

まちづくりサポートセンターの副代表栗原裕治さん(61)は、自分たちの事業を「一種の社会実験です」と言う。無人駅に設けた触れ合いの場は、地域の人たちをつないでいくのかどうか。「長期戦は覚悟の上」と話す豊口さんは、孤独なお年寄りのいないまちを目指し、挑戦を続ける。(横山大輔)

<千葉まちづくりサポートセンター> 市民活動家や建築などの専門家が集まり1999年に設立。代表は福川裕一・千葉大教授。現在は地域の問題を解決する取り組みを事業化する「コミュニティビジネス」の起業家養成講座が事業の柱。役員数16人、会員77人(いずれも2010年度)。同年度の収入は6321万円、支出は5907万円で、うち事業費は5524万円、人件費96万円。みちくさの開所時間は、毎週月・火・木曜日は午前10時～午後1時、水・金曜日が午後1時半～4時半。電043(304)6708